

2021年9月5日 主日礼拝

説教題「受け取る喜び、ささげる決意」ヨハネ福音書 15 章5 節

主任牧師 加藤 誠

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである」(ヨハネによる福音書 15 章 5 節)。

養老孟司さんの『超バカの壁』に次のようなことが書かれていました。「私たちがイライラするのは、自分の問題にしないで、完全に人のせいになっているのが原因だ。人のせいにする傾向は都会の方が強い。都会にはほとんど人の作ったものが置かれているので、何か不愉快なことが起これば他人のせいだと考えがちだ。加えて合理的なものや論理的なものが過剰に重視され、『ああすればこうなる』式の考え方をしていると、自分の思った通りに物事が運ばない時、イライラする」。

なるほど、便利で合理的な生活が当たり前になることで、いつの間にか自分の足りなさを見つめる謙虚さを失い、心のゆとりを失い、視野が狭くなって硬直化している自分の心のありようを問われている思いになりました。

また、なぜ都会の方がイライラ度が高いのかということ、自然とのかかわりが少ないからだとも書かれていました。人間は人との関わりと自然との関わりで生きるわけですが、都会の場合は自然との関わりが圧倒的に少ない。自然は基本的に人間の思い通りにはなりません。農業をしている方たちはそのことをよく知っておられる。都会の生活は自動販売機のように 100 円入れたら 100 円の商品が買える世界。100 円入れたのに金額に見合うリターンがないと「機会が悪い！」と文句を言う。けれども農業は 100 円の労働をしたから 100 円の実りを必ず手にできるわけではない。お天気次第。100 円の労働が空しくすべて無駄になる場合もあれば、200 円、300 円以上の豊かな実りをいただく場合もある。こちらは1円も出してないのに、自然は素晴らしい青空や夕焼けの景色、頬を通り過ぎる心地よい風によって、私たちの心を癒し新しい力を与えてくれたりする。赤ん坊を育てるのもそうです。親が注いだ労力に見合う成長を赤ん坊がすぐに見せてくれるわけではない。赤ん坊相手の子育ては、毎日こちらの思い通りには行かないことの連続ですから、100 円入れたら 100 円のリターンが必ずある世界しか知らないと、とてもやってられません。けれどもその逆に子育てを通して、決してお金では買えない笑顔ややすらぎを与えられたりする。ただただ「ありがとう！」と微笑み、涙するしかない場面を経験させられたりする、見えるものではなく、見えないものに目を注いでいく世界です。

このたび素晴らしい新礼拝堂の建物をいただきました。私たちの目は何を見ているのでしょうか。大岡山さんの設計、松井建設さんの施工。そして新しい講壇やピアノ、礼拝堂の長椅子など。それら「目に見えるもの」の素晴らしさを私たちは目の当たりにしていますが、しかし何よりもまず「目に見えない神さまの、私たちの思いをはるかに超えて注がれた恵み、憐れみ」に大切に目を注ぎ、大切に受け取って

いく信仰をいただいでいきたいのです。

主イエスは言われました。「わたしはぶどうの木。あなたがたはその枝である」。ぶどうの木である主イエスにつながらないなら、私たちはこの新しい礼拝堂に込められた神さまの恵みと憐れみを受け取っていくことができません。「人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れてはあなたがたは何もできないからである」。この「豊かな実」とはどういう実りでしょうか。ここで礼拝した人の人生には、良いことが起こり、何でも思い通りに行くようになる！...ということでしょうか。15章をこのあとをもう少し読み進めると11節「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである」とあります。「豊かな実」とは「神さまの喜び、主イエスの喜びが私たちのうちにあふれる」ことなのです。「主イエスにつながったら、たくさん良いことが起こった！」というのは「豊かな実」とは言わないのです。この礼拝堂に共に集い合い、主イエスの言葉につながり、神さまの愛につながることで、私たちが神さまの喜びにつながり、一人ひとりのうちに神さまの喜びがあふれていく。それが「豊かな実」と言われているものです。

その意味で、神さまはこの新しい礼拝堂がどのように用いられることを願っておられるのでしょうか。この礼拝堂につながる一人一人が自分の暮らしの願いごとだけで完結するのではなく、神さまが今世界で起こされている働きに心開かれ、つながっていくこと。主イエスの祈りにつながり、各人が自分に与えられている能力、時間、働き、お金をささげる決意に導かれていくことではないでしょうか。

一昨日、ルワンダの佐々木さんのオンライン報告会で、一年間ルワンダから東京外語大に留学していたファブリスさんという学生と、ルワンダの佐々木さんの大学に留学している日本人学生二人との対談がありました。その中でファブリスさんは日本滞在中に起こった恐ろしい出来事として、名古屋入管でスリランカ女性が亡くなったことを挙げていました。彼自身、難民としての経験があり、彼女の死は自分の身に重なり衝撃だったと。そして「日本の人たちは難民が置かれている命の厳しさにあまりにも無関心なのではないか。アフリカではみんな生きるか死ぬか、ギリギリの生活の中で政治に無関心ではいられない。でも日本は政治に無関心でも豊かな生活が守られている。学生たちも自分の生活を豊かにするためのアルバイトに忙しくて、他人には無関心であるように思う」と。彼の言葉は都会の中で、ほんとうに視野が狭く、心貧しくなっている私たちのありようを問うている思いがしました。

新しい礼拝堂は、私たちの祈りや献金によって与えられたというよりも、私たちの思いをはるかに超えた神さまの恵みと憐れみとして与えられた器です。その神さまの世界に向けた祈りにつながり、神さまの喜びにつながっていく私たち大井バプテスト教会でありますように。そのことを共に祈り願い、各人が神さまの働きに自分の持てる力を喜んでささげていく生き方に導かれますように。